

39. 都市美運動家・椽内吉胤に関する研究

Yoshitane Tochinai(1888-1945): An Advocate of The Movement for Urban Beauty

中島直人・西村幸夫・北沢 猛
Naoto Nakajima, Yukio Nishimura and Takeru Kitazawa

The purpose of this paper is to trace up the life history of Yoshitane Tochinai, an advocator of the movement for urban beauty. In the early 1920's, Tochinai, originally a journalist, argued that the citizen themselves should improve urban environment and started the society for the research of civic art in Tokyo. Then, he interpreted civic art to the citizens. Besides, he advocated historic preservation and tried to arouse public opinion for urban improvement in his birthplace Morioka through his articles. After 1930, he published a series of papers on urban landscape as identities of local cities and lectured for urban improvement in towns of the Iwate prefecture. In 1935, he founded the society of Japanese urban landscape in Tokyo.

Keywords: Yoshitane Tochinai urban beauty civic art historical townscape urban landscape citizen
椽内吉胤、都市美、都市芸術、歴史的町並み、都市風景、市民

1. はじめに

1)で「美しい景観のまちの育成」が正面から言及されるなど、美しい都市風景の育成は今世紀の主要課題であると認識されている。1)は景観施策の始まりとして戦前期の都市美運動にも言及している。都市美協会を中心としたこの運動については伊東(1978)が「基本的には、天皇制イデオロギーに同調・貢献するもの」²⁾と結論し、「国の顔として帝都の整備を意識した都市美運動」¹⁾が定説となっている一方で、伊東(1978)も指摘する都市計画に対する市民の自覚を促した点については足達(1970、1998)が一貫して「清掃運動」であった⁴⁾と結論している。しかし何れも資料収集を尽くした上での論証には至っておらず¹⁾、国の顔の整備に留まらない市民による生活環境改善という面からの思想的展開や、それを例証する地方都市での運動の史実は未だ把握されていない。

椽内吉胤(とちないよしたね)は1888年に盛岡市で生まれ、新聞記者を経て都市美研究会(翌年都市美協会に改称)創立発起人となり、その後積極的な言論活動、啓蒙運動を行った民間の都市美運動家である(【表-1】)。官界や大学の都市計画家・研究者でないため、官・学に限定された視点からの従来の日本の都市計画史に登場することはなく、履歴や著作は現在殆ど知られていない。しかし戦前期の都市景観に関する言説の展開や官の都市計画と市民との接点を把握する上で、そして市民生活における今後の都市計画のあり方を考える上で、日本の都市計画史上、看過出来ない人物であると考えられる²⁾。

本論は上述した研究の現状を鑑み、都市美運動家・椽内吉胤の今日的な議論に通じる都市計画論に基づいた活

動を新たな知見として提示し、国の顔の整備とされる戦前期の都市美運動の性格を再考することを目的とする。

本論は全国各地の公共・大学図書館での文献資料調査³⁾(【表-2】)と、椽内の長女にあたる笹尾英子氏へのインタビュー調査(2000年2月14日)に依拠している。

以下、【表-1】【表-2】に基づき、椽内が初めて世に問うた著作⁵⁾の出版以降を、①「都市環境」改善に関する啓蒙的な論説を発表していた、都市美研究会を設立する1925年頃までの時期、②1920年代後半、都市美協会常務理事として運動を展開しながら、協会の理念である「都市芸術」を基調とした啓蒙的な論説を発表した時期、③1930年代、「都市風景」をキーワードにした論考や地方都市観察のまとめを行ったが次第に著作が見られなくなっていく時期に大きく区分し、考察を進めていく。

【表-1】 椽内吉胤の略年譜と時期の区分

年	月	事項	網掛けは各時期の主要著作	時期
1888	3	秋田県土木技師・柄内吉トの長男として盛岡で誕生		① 都市環境
1907	3	盛岡中学卒業		
1914		早稲田大学英文科卒業 同年、佐渡毎日新聞入社		
1916		東京朝日新聞入社		② 都市芸術
1918		東京朝日新聞退社		
1922	5	「環境より見たる都市問題の研究」5)出版		
1924	春	帝都植樹協会設立に参加		③ 都市風景
1925		「椽内」という表記を使用し始める		
	10	都市美研究会設立に参加(主唱者)、幹事に就任		
1926	10	都市美協会設立に参加、常務理事に就任		④ 都市計画
	12	「都市計画」12)出版		
1927	12	新しい換紙の会設立に参加(設立発起人)		
1928	1	盛岡都市生活研究会設立に参加(設立発起人)		⑤ 都市生活
1934	4	「日本都市風景」25)出版		
		盛岡都市美協会設立に参加、顧問に就任		
1935	11	日本都市風景協会設立に参加(設立発起人)、常務理事に就任、同時に都市美協会から脱会		⑥ 都市美協会
1945	11	盛岡にて死去。享年 57 歳		

正会員 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 (Univ. of Tokyo)

2. 「都市環境」の時期

(1) 都市問題の現場からの都市環境改善

20世紀初頭、日本の大都市では、貧民窟における都市下層社会問題と都市インフラの欠如から来る伝染病の蔓延という環境問題が結び付いた古典的都市問題と、第一次世界大戦前後からの重化学工業の進展過程での煤煙を中心とした都市産業公害=近代都市問題が複合した形で深刻化していた⁴。椽内はこの時期に新聞社社会部記者を務め、その後も生活・労働環境において都市問題の最大の当事者であった工場労働者を対象とした「工人新聞」を発行するなど⁵、都市問題の現場にいた。「東京朝日新聞」での初著名論説では、「公会堂もよみが、目の前の都市問題をもう少し親切に処置して欲しい」⁶と主張した。

この論説に先立つ1922年5月に椽内は5)を出版していた。この著書も「新聞記者時代匆忙裡の所産」⁹であり、都市環境が児童に与える影響という視点から都市問題を論じた。そして「総ての科学を徹底的に応用して、従来機械的に出来上がった都会を有機体化し、しかも同時に自然化、公園化していく」⁹都市計画による都市環境の改善の必要性を結論としていた。椽内は「健康で愉快地に住まうべき場所」⁹としての「理想の環境」⁹の創出という市民生活の視点から都市計画に着目していた⁶。

(2) 国・行政の責務と民間・市民の責務

5)の他「東京朝日新聞」、「週刊朝日」といった大衆紙・雑誌を中心に発表されたこの時期の椽内の論説は、都市環境の改善のための都市計画の樹立、公園系統の確立といった国・行政の責務を主張する以上に、市民一人一人の責務について強く論じていた点が特徴的であった。

椽内は「少なくとも我々市民が近代都市生活に伴う種々の凶徴を一層強く意識し、その救済をば単に市役所

の仕事に委せるということではなしに、各自の現実・当面の問題として、将来都市の改造ということに協力して行きましたならば…」⁷と市民の責務の自覚を促した。

1923年の関東大震災後には、行政による「帝都の装景に愧じない植樹計画」⁸の樹立を強く主張したが、同時に愛樹心の欠如を指摘し、「民間に於いても、植樹協会の如きを設立し、大いに植樹宣伝に努め、時に植樹デーをも開催し官民協力して植樹に努めたならば、人工的にせいびした新帝都を一層荘厳化し、美化し、衛生的ならしむるに違いない」⁸と、民間・市民の責務を主張した。

(3) 都市美運動家・椽内吉胤の誕生

そして1924年春には、椽内は東京で最初の民間植樹組織である帝都植樹協会を設立し、市民・民間の責務の主張を实际運動に移した。帝都植樹協会では、植樹デー(4月3日)に際し、宣伝カードの配布や東京市公営課を通じての簡易宿泊所・託児所への植樹を行った。

この頃から椽内は、「実用としいえは美の一切を蹂躪してもかまわぬという都市計画の下におかれた市民は、禍なるかな」⁹と、樹木や水辺、広告看板取締りといったテーマで、都市美に関する論説を発表し始めた。

1925年10月には都市美研究会の創立発起人となり、「タウン・プランナーやシビック・アーティストは勿論、建築家も美術家も、その他いやくも都市改良家、都市研究者として都市問題に興味と熱意を有せらるる士は漫然書斎や画室に閉じこもっているべきではあるまい」¹⁰という創立趣意書を起草した。幹事に就任した椽内は、都市美研究会の実質的な主唱者であった⁷。帝都植樹協会の植樹デーでの事業も都市美研究会に引き継がれた。

1925年半ばからは、表記を本名の「柝内」から「椽内」に改め、名実ともに都市美運動家・椽内吉胤が誕生した。

【表-2】本論で収集・参照した椽内吉胤の著作と時期の区分

年	書籍					雑誌				新聞			
	著書	書籍中の論説	都市公論	都市問題	大正	都市美	住宅	週刊朝日	中央公論	その他	東京朝日	岩手日報	その他
1922	■「環境より見たる都市問題…」5)						■				■		
1923							◆◆		■		■		
1924							◆◆		◆				
1925							■				■		
1926	◆「都市計画」12)		◆◆				○				○	8	
1927							●○○○			◆(照明学会雑誌)	◆△	17	◆(東京日日新聞)
1928							○○○○○	●●			△△	11	
1929							◆●○	●				20	◆◆◆△ (秋田魁新報)
1930	(日本工業大観)◆		■	◆◆			●●			◆(庭園と風景)	△	12	
1931	◆「東京市の道路」									◆(任政)		11	◆△(秋田魁新報)
1932				◆◆◆◆◆		◆△	○			●(新岩手人) ■(庭園と風景)		11	
1933			△	◆◆◆◆◆		●○△				●●(人情地理)		24	
1934	○「日本都市風景」125) (第四回全国都市問題会議)◆◆			◆◆◆◆◆	△				●			20	●●●● (東京日日新聞)
1935			△	●●		△				●(文芸春秋)		43	
1936										●(新岩手人)		31	
1937			△							●(日本証論) ○(新岩手人)		8	△△△△△ (東京日日新聞)
以降	(盛岡中学六十年記念誌)1940○								◆				
計	8		3	2(△3)	23	3(△8)	17	8	4	11	7(△4)	217	9(△8)

主題分類 ■都市環境改善 ◆都市芸術 ●都市風景/都市鑑賞 ○その他 △座談会発言・記事内コメント等 ()内は収録雑誌名 網掛けは各時期の主要著作

3. 「都市芸術」の時期

(1) 都市美協会の活動理念としての都市芸術

都市美研究会が1年後に改組され設立された都市美協会でも椽内は常務理事として会務を担った。この時期、『都市美』の概念を明らかにし、『都市』と『美』との関係を確実にするには、どうしても『都市芸術』ということを知る必要がある¹¹⁾として、椽内は都市美研究会・協会が活動理念として掲げたシビックアート＝都市芸術⁸⁾の解説を試みた。椽内が主張した都市芸術の要点は、①外部から付加することが可能な装飾ではなく「内部から発する、社会生活の己みがたき表現」¹¹⁾であり、②市民の生活に必要な「あらゆる施設、行政、経済、交通、保安、衛生、教育等一切の都市の施設を含んでいる」¹¹⁾、③「公共乃至民衆をその目標としてをると同時に、『実用』ということに立脚している」¹¹⁾、④決して固定的ではなく「矯正の方面のある」¹¹⁾という諸点であった。「シヴィック、テーストを持つように仕向けてゆく」¹¹⁾ことで「都市芸術」が自ら発酵して来るに違いない¹¹⁾というのが、都市美創造プロセスの椽内の解釈であった。

(2) 市民を向いた都市計画論

このような「シビックアートの大綱を解釈し、従来の都市計画に関する研究に対していささか新生面を開拓した」¹²⁾のが、都市美協会設立直後の出版の12)であった。

椽内は従来の都市計画関連図書の問題を「いかにも無味乾燥で食いつきが悪いのです。随って、「都市計画」ということも、今日、普通の人の考では、それは専門家畑のもので、所謂素人の容喙を許さぬもののように決めている風であります。」¹³⁾と指摘し、「「都市計画」ということも、私共の家の前の道路の具合や、塵芥、掃除、などといった日常茶飯事の続き合である」¹³⁾と主張した。「一般市民並に其の方面に興味を補うて余りあるもので、都市計画市民読本としても適切なる著述である」¹³⁾、「文章極めて平易、実例に富み引用の文多く真に初学にして都市の何物たるかを知らんとする者にとって絶好の好著」¹⁴⁾という書評を得るなど、12)は広く一般市民を対象とした都市計画の解説・啓蒙書として受け入れられた。

最終章では、「これまで自分の家さえよければ他はどうでもいいと思っていた市民は、漸次共同の住家としての都市のいものを考えるようになり、都市が段々整頓し、活動に便利であるということと同時に、愉快な所ということになれば、自づからシビックプライドを感じるようになり、始めて愛市中心の芽が萌出し、自治の精神にめざめるようになるでしょう。…その時期になっては、都市改造の動力は、役所ではなくて、市民の共同に移り、随分思い切った改造計画が企図されるようになるでしょう」¹⁵⁾という市民の主体的活動による、調和的に統一さ

れた都市景観を「都会の幻想」¹⁶⁾として提示した。

椽内はこの時期、12)以降も主として新聞を通じて都市美協会のスポークスマンとしての役割りを担っていた。

例えば都市美協会が名声を高めた1929年末から翌年にかけての警視庁塔楼反対運動で、新聞紙上で都市美協会の意見を主張したのは椽内であった。又、都市美協会の活動のうち唯一地方を舞台とした秋田濠端埋立反対運動は、旅先の椽内が埋立計画の情報を得て、地方紙である「秋田魁新報」に「秋田市民に訴ふ 濠端の埋立と醜悪なる看板」(1929年5月14日)を投稿したのが始まりであり、その後も論説を投稿し世論形成を先導した。

椽内のこれらの活動は「今日の時期は、当局でも民間の団体でも、ただ都市の研究や調査のみ主力をおく時期ではなくて、都市研究及都市精神勃興の苗圃となるところの一般民衆の都市に対する実際の興味を培ふことに努めることが何より緊急だ」¹⁵⁾という認識に基づいていた。

(3) 歴史的町並み保存

椽内の趣味は古道具の収集であったが、「我伝統の襖紙へ新時代の息を通わせなければならない」¹⁶⁾として「新しい襖紙の会」を主唱設立するなど、その思考は運動家としての資質、懐古のみではない創造性を備えていた。

この時期の椽内は、「住宅」(住宅改良会の刊行)や「週刊朝日」を中心に、日本の伝統的な道具や設え、更には民家を主題とした数多くの随筆・論説を発表した。

椽内は、これらの論説の中で、歴史的町並みに関する先駆的な提案を展開した。それは①個々の建築よりも集団としての町並みに着目し、

② 「街なみ」

に見る一種

の美しさは、

どうしたところから発祥してくるものであるか…ということに対しては今日においても充分考察してみる必要がある」¹⁷⁾という問題意識の上で、③新しい創造の範として歴史的町並みを保存していく提案であった。

京都では「都市造営の上に自ら一種のしめくくりが約束されていた往時、その個々人には家宅を構えてゆく上の用意が共通していた往時、そうした往時の文化心といったものを来るべき都市の造営の上に活現して欲しい」¹⁸⁾とし、周囲と不調和な建物の建築制限を行う「保存地域」設定を提案した。又、旧い宿場町である三重県関町を訪れた際には、「将来の街の造営の上に一つの暗示を得るよすがともしるところにある」¹⁹⁾と町並み保存を主張し、以降「御談合賜はらば微力乍ら犬馬の方を辞せざる者に有之候」²⁰⁾として当時の関町長宛てに5度に渡り書簡を送るなど、継続的な働きかけを行った。



【図-1】 椽内による町並みのスケッチ¹⁷⁾

これらの主張は 21)にまとめられた。「都市計画とは全然新しい都市創作に伴う企業活動でいかなる旧物もその当然の犠牲として破壊し去られて了つても蒙も悔なし…」²¹⁾といった考えや、逆に古ければ何でも執着する考えの双方を批判し、「都市に対しておくゆかしい歴史背景と、グローリーとを反映せしめ、それに接する者に一種落ちついたムードを賦与する因とするのみならず、その人間の享樂しうる快樂の最高形式であり且つミニマル・アートの助演者としての審美的効果」²¹⁾を有するものの保存を主張し、欧米諸都市の状況を紹介し、「我が国でも今後はその保存範囲を広めて、個々の物から、一地域、一群の物にまで及ぼすべきだと考える…保存のための保存ではなくて、人類の崇高な本質的意欲活動に発源する。」²¹⁾と保存の意義、範囲について先進的提案をした。

(4)故郷・盛岡での活動

椽内は都市美協会常務理事としての活動、旅の先々での歴史的町並み保存の提案の他に、故郷盛岡でも地方紙の岩手日報社筆・後藤清郎⁹⁾との信頼関係を基に、1925年の講演会以降、「岩手日報」への都市計画に関する論説の継続的な発表を中心とした活動を行った（【表-2】）。

椽内は行政の責務として盛岡に都市計画を導入する必要性を説いたが、「国の定める『都市計画法』を適用しさえすれば必ず合理的な優良な都市が実現するものと思うのは早計に失する。…やはり、市民諸君の愛市中心にまち、真に自己の住む町をよいものにしたいという誠意から、常に世論の形をもって、実行機関を把握しておる当局を鞭撻し、当局もよく市民の声を聴き、あまねく衆知をいれて、一面に欧米都市の進歩せる経営方法を参考とし、他面によく己の都市の民情風土等を斟酌して最も合理的なプランをたてねばならない。」²²⁾と主張し、盛岡の抱える具体的問題（田圃埋立の可否、中津川風景の保全等）提起や意見表明、市民による都市改良会創設の提案等の論説を通じて、都市に対する市民の世論の形成を促した。

1928年から1929年にかけての農校跡地の三業地指定取消し問題では、椽内の論説をきっかけとして市民の運動が喚起・応援され指定取消しを導くなど、具体的な成果も収めた。又、椽内が主唱する形で、1928年には盛岡の市民有志によって「都市計画は単なる都市造営的の変形改造であってはならぬ。□新的な市民の意図が都市形態の上に現れねばならぬ」²³⁾という主意で盛岡都市生活研究会が設立され、椽内はその活動を東京から応援した。

椽内は市民による都市づくりの萌芽を導き出していた。

4. 「都市風景」の時期

(1)都市風景論の展開

椽内が都市風景という言葉を意識的に使い出したのは

1930年10月の24)「発見した都市風景」からであった。椽内は高いビルに登り、初めて「軽い気分から一歩突き進んでやや意識的にその風景を対視」²⁴⁾し、俯瞰した都市の全貌に新鮮で「特異な美」²⁴⁾を発見した。

その後1932年には「大大阪」（大阪都市協会）に「都市風景構成に関する論考」²⁵⁾を続けて発表した。

26)では、都市風景の輪郭を規定する地形的特性に「挑戦してその改変を企及」²⁶⁾するのではなく、「順応し、それを利導」²⁶⁾するのが賢明であるとし、「遠方に見える山、丘、水（河、湖、沼）を初めいかなる風景でも美しいもの」²⁶⁾の保存、都市内部の美を引き立てる遠景や公館への展望、街路ヴィスタも含めて眺望景観の重要性を主張した。27)では「都市美学の上では「都市風景」の代わりに「都市個性」或は「都市風格」というべきだと考える」²⁷⁾「有形無形の要素複雑なる総合、組合せによって始めて都市風景の全面が見渡され、一つの纏った形態が付与されるに至るもの」²⁷⁾と都市風景を定義し、28)では要素としての建築、サイトプランニングに言及した。

ラジオ放送では「都市風景という言葉は仍にその都市の個性をでっちあげる上に抜き差しの出来ないある特徴を持った風景事物を意味する」²⁹⁾と簡明に説明していた。

(2)地方都市の個性としての都市風景

1934年には25)「日本都市風景」を出版した。日本全国の町々を、半日か一日とにかく「テクって」²⁵⁾「躍動しつつある風景のひらめき」²⁵⁾を逃さないために「道具をかなぐりすて」²⁵⁾「印象」に開けばなしに徘徊」²⁵⁾し、時に「行き当たりばつかりにカメラに収めたり、スケッチしたり」²⁵⁾した「紀行文的都市観察」²⁵⁾であった。

この都市風景の旅の目的は、「おしなべて東京まがいの街」²⁵⁾となりつつある地方の市街地の中にあっても、残存する「郷土色を盛ったあの小さな木造や塗ごめの家」²⁵⁾、「裏町や横町に残る旧来の家並み」²⁵⁾といったその都市ならではの都市風景、つまり都市の個性を発見していくことであった。椽内は各都市の都市風景を記録することで、「地方の都市の人々はその都市がそれぞれもっている地方色というものを認め、ただいたずらに大都市の模倣なんかせずその独自の「持ち味」をなるべく醇化助長するようつとめて一層好ましい風景をもつ都市を造る方に今後方針を代えるべきだ」²⁵⁾と主張した。

他にも訪日外国人の日本都市風景評の収集を精力的に行い、「迎合する要はない」³⁰⁾が「他山の石とせず…内発的にその都市風景の醇化向上」³⁰⁾に努力すべきだという持論を展開するなど、椽内は日本の都市風景、特に地方都市の個性としての都市風景の育成を主張した。

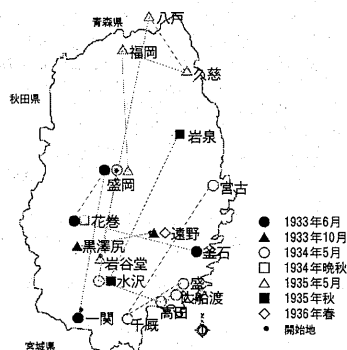
(3)岩手の町々での講演・実地指導

「岩手日報」での論説を中心とした盛岡での世論形成

の運動は、この時期、岩手県内の町々での講演・実地指導へと展開した。1933年6月に岩手日報で報道された、一関町の郷土芸術運動の市民団体とも協会による都市美鑑賞活動に、東京から椽内が奨励の手紙を送ったことがきっかけとなり一関町に招聘された。そして更にこれを機会に周辺の市町村からも講演、実地指導を要請された。

講演・実地指導に向うにあたって椽内は「これは貧乏クジの都市研究なんかは多年やせがまんをかけてかじりついてきた余徳ともいうべきものであろうか」³¹⁾と喜び、「一関の諸君よ、ねがわくばこの熱意を永久に持続されて、外観的に内容的に、一層町の美化醇化に努力せられんことを、若し、それがために微力ではあるが私と協力して下さるならば、モット内外に誇りうる美しい町、住み心地のよい町を実現しうる堅い自信を持っていることをここに宣言してはばからぬものである」³²⁾とした。

椽内は1933年から1936年にかけて、岩手日報社の幹旋もあり【図-2】のように岩手県内の各都市を精力的に廻り講演・実地指導を行った¹⁰⁾。「僕の講演なども、旅興行みたいな一夜さの慰みものと同じ視されちゃ心外の至りで、僕は、命のある限り永い眼で岩手の町町の将来をみてゆきたいと念じている」³²⁾という決意で、行政あるいは水沢の青年同志会や遠野の市民有志らに請われ「自分たちの住む町を如何に開発するかについての一種の情熱を示すような」³³⁾町を称揚し、助言を与えた¹¹⁾。



【図-2】岩手県内での椽内の講演・実地指導の軌跡
 (「岩手日報」に掲載された論説・記事から判明するもの)

(4)都市美協会からの脱会、日本都市風景協会の設立

一方東京では、1933年に都市美協会事務所が東京市土木局内に移され東京市関係者が協会の運営を掌握していく中で、椽内の都市美協会への関与は小さくなっていった¹²⁾。そして「都市美協会の伝統と本来の精神が無視され、会の運行は、役員たる土木局の役人の独断によって決められ、その会合の如きも恰も役所の会議の如き形式のものとなり」³⁴⁾、東京市の意向で活動が制約されるという理由で都市美協会を1935年11月に脱会し、同時に、日本都市風景協会を自ら主唱し、設立した¹³⁾。新聞では「趣

旨は都市美協会と殆ど同じ」³⁵⁾であるが、「都市美協会如く官僚の専行を口威せねばならない様なものでなく活発に目的を遂行せんとする所に同協会の特異点がかがわれる」³⁵⁾「帝都の都市美を、無情な破壊から護り、情味豊かに育てて行こうという自由人の集まり、その運動を都市を愛する民衆の声として守りたてて行こうという会合」³⁶⁾と、都市美協会脱会理由に対応する報道がなされた。椽内は「草創に伴う荊棘の道を予想しつつ」³⁴⁾再び民間・市民の責務としての都市美運動を目論んでいた。
 (5)椽内の都市美運動の終息

盛岡では、1934年に椽内の「日本都市風景」の出版記念の集いの場で、後藤清郎を中心として盛岡市長を会長、椽内を顧問に、盛岡での都市美運動を担う団体として盛岡都市美協会が設立された。主に椽内の帰郷時に町歩きイベントを打つなどの活動を行っていた。しかし全市的な都市美運動へと展開する前に、1937年、椽内は岩手日報社の社内紛争¹⁴⁾に役員側として関わり、従業員側の代表であった後藤と対立し、関係が悪化し、以降盛岡都市美協会の活動は途絶えた。紛争後、後藤が掌握した「新岩手日報」に椽内の論説が掲載されることはなかった。

一方東京では、椽内は日本都市風景協会常務理事として、銀座通聯合会による銀座美化運動への協力や東京市内街路樹調査等の活動を展開していたが、1937年には「期待をかけてきた我が東京の風景がかくも駁雑であり、それに対してあまりにも無感覚な東京人」³⁷⁾という嘆きを見せるようになった。皇紀2600年(1940年)に向けて漸く盛り上がりつつあった東京の美化運動には「一種絢爛なデコレーション」³⁷⁾に過ぎないと批判的であった。

そして、1937年6月に発表された³⁸⁾では、「いささか社会改良家気どりでやってきたのも、憶えば鳥許の振舞とでもいおうか」³⁸⁾と自らの都市美運動を振り返り、更には「かのチャールズ・マルフォード・ロビンソンが『都市計画の意義はもつともつと深遠なものがあって、その都市に住んでいるというプライドを感じ、一種のインスピレーションにも触れ、何かしらグードと希望を見出し出していけるよう…即ち、都市生活者の精神や道德の上に良い影響を及ぼすように仕向けていき、人生というものには金儲け以上の何物かがあるという事実を知らしめるようにその都市を改造することにある』云々と説いているところであるが、そんな高遠な指導精神などは葉にしたくても無く、単に道路を広げたり港湾を整備したりするに止まっていてわれわれの人生の本質の問題に触れざる限り、かかる都市計画にはまた多くの望みをかけることができぬであろう。」³⁸⁾と諦念を綴った¹⁵⁾。

日本都市風景協会の活動は続いていたが¹⁶⁾、1938年以降、椽内の著作が市民に向けて広く発表されることはな

くなった(〔表-2〕)。都市美運動家・椽内吉胤は「真に彼氏のプランを実際にうつつてやらせてみる目明き」³⁹⁾に出会うことなく、姿を消していった。

5. まとめ

以上、次の事項が明らかになった。

椽内は①都市問題の現場で都市環境の改善の必要性を認識し、国・行政の責務として都市計画の必要性を訴えるとともに、都市環境に対する市民の責務の自覚を促し、自ら都市美研究会の主唱者となり、都市美運動を開始した。②その後、都市美協会の理念である内発的な都市芸術を唱え、市民への啓蒙活動を積極的に行った。又、歴史的町並み保存に関する先駆的な主張を展開した。故郷盛岡でも世論形成の運動を行った。③1930年頃より都市の個性としての都市風景に関する論考を発表し、地方都市を旅し都市風景を記録した。岩手の町々では講演・実地指導を行い、更に日本都市風景協会を設立し都市美運動を継続したが、次第に諦念を示し、姿を消していった。

都市美運動の主唱者椽内の歩みは、都市美運動の性格として、帝都の景観整備以上に、その起源が市民の責務としての都市環境の改善であり、根底に存在した市民主体の都市計画という理想、歴史的環境保全や地方都市の個性としての都市風景育成への思想的展開にこそ先駆性、今日的な議論の出発点を見出し得ることを示している。

補注

- 1) 2)~4)では椽内ら都市美運動を主導した人物の著作・思想への言及はなく、都市美協会機関誌『都市美』の一部が収集・参照されているに過ぎない。
- 2) 25)の筑摩叢書復刊版(1987)の解説で声原義信は「誠に「街並の美学」の先覚者であった」と評価し、西村幸夫(1994)「歴史的環境の保存論と保存制度(戦前編)」、建築史学 23 は町並み景観に着目した先駆者として紹介するなど、都市景観研究分野において椽内の重要性は指摘されてきたが、履歴・思想の遍歴等は不明のままであった。
- 3) 椽内の著作を各種雑誌記事総説や総目次、本誌通読により抽出した。各著作の主題は複数に跨るものも多く、分類は必ずしも一意的ではない。〔表-2〕以外にも、20)や「最新都市計画」(収録書誌不明、東京農業大学上原敬二文庫に抜刷あり)、39)等を収集した。
- 4) 都市問題の分類は、石塚裕道(1991)「日本近代都市論 東京：1868-1923」、東京大学出版社、pp.108-122を参照した。都市問題の帰結として、肺結核の死亡者がピークを迎えたのは1918年であった。
- 5) 笹尾英子氏インタビュー調査より。現物・記録は確認されていない。
- 6) 5)の題字を後藤新平、序文を渡辺鏡藏という都市研究会幹部が寄せている。椽内は既にこの時期には都市研究会会員として都市計画という新しい社会技術に触れていたと推測される。
- 7) 椽内自身、「不肖が主唱して創立を見るに至った」³⁴⁾と回想している。
- 8) 当時、都市芸術はシビックアートと同義で使用された。例えば12)では都市芸術に「シビックアート」というルビがふられている。又、都市美研究会の趣意書や、椽内の回想「今日の都市美の語源であるシビックアート」³⁰⁾、都市美協会の欧文名「Society of Civic Art」からは、都市美協会の「都市美」が「シビックアート」を意味していたことが分かる。
- 9) 後藤清郎(1889-1945)：1909年盛岡中学卒業。1917年東大政治学科卒業、報知新聞記者などを経て、1923年に岩手日報社の主筆、後に岩手日報社社長。「椽内氏は日本に只一人の人だと思っている。都市研究を或は都市計画を椽内氏の如く、適当な言葉はないが哲学的なでも云おうが、つまり文化の全面から(道徳、宗教、芸術)から眺めて批評し議論を立てている人は余り外にない。こういう意味で私は常に椽内氏を師とし、且つ新聞社の計画などについても、指揮を仰いでいる」(後藤清郎(1934)「椽内氏の近著『日本都市風景』を讀みて」、岩手日報4月16日)、盛岡での椽内の最大の

支持者であった。

- 10) 他にも後藤清郎の兄が経営する黒部鉄道に招聘され、宇奈月温泉町の改造計画に関する実地指導を行うなどの活動を行った。
- 11) 椽内は自身の役割を「町長さんや町の町会議員といった人たちの僕に対する態度までもその『愛町心』といったものの深度が判断される、つまり僕はそのパロメーターのようなものでないのである」³²⁾としている。
- 12) 例えば、椽内は1931年創刊の都市美協会機関誌『都市美』の編集発行人であったが、1933年の4号以降はその任から外れている。
- 13) 1935年11月25日の日本都市風景協会創設第一回顔合わせの親睦会に集ったのは椽内の他、長谷川如是閑(評論家)、川路柳村(詩人)、黒田鶴心(美術評論家)、福原信三(資生堂社長)、岸田日出刀(東大：建築)、田村剛(東大：林学)、安藤正純(政治家)、岸衛(政治家)、石川栄耀(都市計画東京地方委員会技師)であった。
- 14) 岩手日報社編(1988)「岩手日報 110年史」、pp.238-254に詳しい。
- 15) 椽内はしばしば諸外国の事例・言説を紹介したが、椽内に渡航経験はなく、基本的に文献から情報を得ていた。中でもアメリカの都市美運動の主唱者、椽内同様ジャーナリスト出身の C・M・ロビンソンの著作は、12)で「最も教えられるところがあった」と特記されている。
- 16) 日本都市風景協会は停車場美化視察座談会(1937年3月)、内視視察座談会(同4月)、旧鹿鳴館見学会(1938年7月)、風致地区見学会(同8月)等の活動を行った。1939年には、会長の曾我祐邦子爵が東京美観地区の美観審査委員会委員に任命されている。

参考・引用文献

- 1)建設省編(2000)「建設白書2000」、pp.137-173、ぎょうせい
- 2)伊東孝(1978)「昭和戦前期における美観思潮とその性格機能 -主として東京における美観地区・風致地区の指定と都市美運動による考察-」、都市計画論文集 13, pp.295-300
- 3)足達富士夫(1970)「地域景観の計画に関する研究」、pp.84-94
- 4)足達富士夫(1998)「近代景観思想の一面」、明治建築研究会編『日本の近代都市・近代建築論文集』、pp.139-144
- 5)椽内吉胤(1922)「環境より見たる都市問題の研究」、東京刊行社
- 6)椽内吉胤(1922)「死屍累々」、東京朝日新聞6月2日
- 7)椽内吉胤(1923)「乱脈な都会」、東京朝日新聞4月2日
- 8)椽内吉胤(1923)「新帝都の植樹計画」、中央公論 38(12)、pp.51-58
- 9)椽内吉胤(1924)「都会の樹木と「柳」」、週刊朝日 5(20)、p.12
- 10)(1926)「都市美研究会の設立」、建築雑誌 477、pp.105-106
- 11)椽内吉胤(1926)「都市美化運動と都市芸術(二)」、都市公論 9(5)、pp.18-23
- 12)椽内吉胤(1926)「都市計画」、のれん屋書房
- 13)石原憲治(1927)「椽内吉胤著『都市計画』を読む」、東京日日新聞2月27日
- 14) (1926)「椽内吉胤著 都市計画」、造園学雑誌 3(2)、pp.80-81
- 15)椽内吉胤(1933)「我都市精神不振の当因」、大正 9(2)、pp.75-79
- 16)椽内吉胤(1928)「新しい襖紙への感懐」、住宅 13(1)、pp.21-23
- 17)椽内吉胤(1930)「筆筭の前に頼づく」、住宅 15(2)、pp.43-45
- 18)椽内吉胤(1928)「京都の町家」、週刊朝日 14(22)、p.17
- 19)椽内吉胤(1929)「宿場の街を歩く」、週刊朝日 16(6)、pp.34-35
- 20)椽内吉胤(1929)「大北関町長宛書簡」、(1985)普請研究(12)、pp.13-14に収録されたものを参照
- 21)椽内吉胤(1932)「近代都市と旧物保存」、大正 6(6)、pp.42-46
- 22)椽内吉胤(1927)「実行期に入れる盛岡都市計画(一)」、岩手日報9月13日
- 23)(1928)「都市生活研究会」、岩手日報1月17日
- 24)椽内吉胤(1930)「発見した都市風景」、大正 6(10)、pp.82-83
- 25)椽内吉胤(1934)「日本都市風景」、時潮社
- 26)椽内吉胤(1932)「地形と都市風景・計画」、大正 8(4)、pp.77-80
- 27)椽内吉胤(1932)「都市風景の構成」、大正 8(1)、pp.105-109
- 28)椽内吉胤(1933)「都市風景構成要素の審美的意図としてのサイト・プランニング」、大正 9(6)、pp.45,71-73
- 29)椽内吉胤(1931)「奥羽地方の都市風景を語る(一)」、岩手日報7月6日
- 30)椽内吉胤(1934)「外人の日本都市風景観(続)」、大正 11(5)、pp.39-43
- 31)椽内吉胤(1933)「一関美化運動から(上)」、岩手日報7月7日
- 32)椽内吉胤(1935)「講演行脚餘瀝(下)」、岩手日報12月26日
- 33)椽内吉胤(1934)「動き出した郷土の町々その当面の諸問題(3)」、岩手日報6月23日
- 34)椽内吉胤(1936)「我都市文化運動の一断面 私が都市美協会を脱退する迄」、岩手日報1月12日
- 35)(1935)「都市風景協会生る」、岩手日報11月30日
- 36)(1936)「都市美を護ろうと自由人の集り」、報知新聞2月19日
- 37)椽内吉胤(1937)「三年後の東京 都市芸術の観点から」、中央公論 52(4)、pp.408-416
- 38)椽内吉胤(1937)「東京といふところ」、日本評論 12(6)、pp.332-339
- 39)一記者(1935)「新生岩手に踊る人々71 椽内吉胤君」、岩手日報3月20日